

第 12 号

発行日 平成28年2月26日
 発行者 〒036-8561 弘前市文京町3
 弘前大学理工学部後援会(理工学部内)
 印刷所 (株) 笹 軽印刷
 連絡先 佐々木 実 (理事・教員)
 TEL : 0172-39-3614

弘前大学理工学部後援会報

会長ご挨拶

弘前大学理工学部後援会
 会長 高木 幸 路



昨年十一月、会長に就任しました高木と申します。昭和五十一年三月、弘前大学理学部数学科を卒業後、県立青森東高校校長を最後に三十六年間、本県高校教育に携わって参りました。よろしくお願いいたします。

前任の三浦会長は、八年間、弘前大学理工学部及び大学院理工学研究科の教育や研究、就職等の諸活動の充実を図る助成事業に取り組み、数々の業績を残されました。今回の仕事を引き継ぐことになり、誠に光栄に存じます。後援会設立以来十二年の歴史に恥じることなく、しっかりとした運営基盤に立つて、母校のために会の活性化と発展に力一杯邁進する所存であります。

ご存知の通り、今春、弘前大学は学部・学科が大幅に再編されます。理工学部においても既存の学問領域が再編され、「自然エネルギー学科」新設等の学科改組によって、新たな学問の体制化が図られます。この変革の時期に会長職を引き継ぐことは、全く身の引き締まる思いがします。「安全・安心な持続可能な社会の構築」「グローバル社会に向けた理工系人材の養成」という学部の大きな柱の具現に向けて、後援会本来の役目を十分果たして参りたいと思います。

さて、未曾有の大災害「東日本大震災」が発生してから、五年が経とうとしております。想定外の規模の地震・津波によって、東北から関東にかけて、人々は甚大な被害に遭いました。これまで築いてきた財産や生活すべてを失ったばかりではなく、掛け替えのない肉親や友人までも失い、「心の拠り所」を一瞬にして奪われてしまいました。その光景は、筆舌に尽くし難いものであります。更に被害はそれだけに止まらず、未だ多くの危険に直面する「福島第一原発事故」が発生しました。環境汚染のために故郷を追われた人、復興の一筋の光さえ見えず自殺する人、被曝から健康に重大な不安を抱えてしまった人、情報が入る度に全く言葉を失ってしまいました。当たり前のことが一つずつ崩れて科学技術への信頼が失墜し、人々は怒りやこれまで体験したことのない絶望の中で苦悩の日々を送っております。「東京に空がない ほんとの空が見たい」と言ったのは、詩人高村光太郎の最愛の妻、智恵子です。彼女は、福島県安達郡油井村字漆原(現在の二本松市)出身の洋画家であり、自然豊かな福島をこよなく愛し、毎日阿多羅山(安達太良山)の上に見える青い空こそが「ほんとの空」だと述懐しています。避難する人々や汚染された故郷の自然を見たなら、彼女はどんなに悔しく辛い思いをするでしょう。

この複合災害の発生時、私は青森東高校に勤務していました。生徒達は被災地のあまりの惨状に驚き、不安、哀しみの中で誰もが心を痛めていました。いたたまれない気持ちから被災地に向けて支援活動を行った他、自然災害や科学がもたらす脅威について全校生徒が自主的に学ぶという機会を得ました。私は

彼等に次の言葉をかけました。「諸君が行っている学びこそ、勉学の本来の姿です。被災地の惨状に泣き、憤り、不安に心は震えたことでしょうか。目の前で起こったことを風化させないで欲しい。諸君が真に被災地の人々に寄り添えるのは復興のときです。五年、十年後か、もっと先になるかも知れませんが、環境との共生を目指す研究者、被曝医療に取り組む医師やスタッフ、復興に立ち上がる行政や技術者等、どの分野に進んでもしっかりと学んで欲しい。私は諸君と共に歩み、支援する」と。今、後援会長として、学生達と共に歩み、約束通り支援できることを、誇りに思います。

理工学部が刷新します

理工学研究科長・理工学部長 宮 永 崇 史



理工学部後援会の会員の皆様には日ごろから大変お世話になっております。後援会からのご支援をいただき、理工学部および理工学研究科の様々な事業が有意義に行われていくことをここに報告するとともに、心から感謝申し上げます。

さて、昨今の理工系人材の育成に重点を置いた国の政策および地方の活性化推進の流れを受けて、弘前大学理工学部は平成二十八年度より、入学定員をこれまでの三百名から三百六十名と増員し、学科構成が刷新されます。これまでの六学科を一部再編し、自然エネルギーについて学ぶ学科を全国に先駆けて新設します。それによって、数物科学科(数

理科学コース、物質宇宙物理学コース、応用計算科学コース、物質創成化学科、地球環境防災学科、電子情報工学科、機械科学科（知能システムコース、医用システムコース）、自然エネルギー学科の新しい六学科体制となります。理学と工学の融合を機軸として深い基礎から幅広い応用まで学べるというこれまでの理工学部の特徴を堅持し、さらにより現実の社会問題の解決を見据えた教育・研究を進め、地域の再生という問題に取り組み体制を念頭において再編されました。現在、国の内外を見ましても様々な問題が噴出しており、まさに大変革が必要な時期を迎えつつあるといえます。これまでの弘前大学理工学部の伝統と強みを生かして、これからの時代の流れに十分対応できる学科編成になっていると考えています。また、より高度な理工系人材養成の必要性を受けて、大学院博士課程の入学定員も増員しております（前期課程：九十名から百二十名、後期課程：八名から十二名）。皆様には新理工学部の今後の発展を見守っていただくとともに、十分期待を寄せていただきたいと存じます。

末筆ながら、会員の皆様のご健勝をお祈りするとともに、今後とも理工学部・理工学研究科の様々な事業につきましてご理解とご支援をいただけるようお願い申し上げます。

理工学部・理工学部創設

五十周年記念事業について

理工学部・理工学部創設五十周年記念事業実行委員会WG

理工学研究科（理工学部物質創成化学科併任）
教育研究評議会評議員

糠塚 いそし

理工学部・理工学研究科の母体の一つは、大正九年に設置された旧制の弘前高等学校にあり、昭和二十四年の新制国立大学発足時に弘前高等学校は、弘前大学文理学部として承継されました。その後、昭和四十年に文理学部が改組されて理学部が設置され、さらに平

記念式典・記念講演会



宮永研究科長式辞



佐藤弘前大学長挨拶

にご報告させていただきます。

まず、事業タイトルを「理工学部・理工学部創設五十周年記念事業」としました。これは、お隣の農学生命科学部の五十周年記念事業を参考に決めさせていただきましたが、理工学部の理念である「理工融合」はその中に理工学部の精神を受け継いでいるからこそであり、理学部と理工学部の歴史は一体となって捉えるのがふさわしいとの考えを示しています。

さて、記念事業としては「記念式典」「記念講演会」「祝賀会」及び「キャンパスツアー」を実施致しました。実施日は総合文化祭期間中の十月十七日（土）と十八日（日）とし、遠方の方も学内の様子を楽しんでいただけるように考えました。記念式典では、まず地域の

成九年には理学部が改組されて理工学部が設置されています。このように、平成二十七年（二〇一五年）は理学部が誕生して五十周年の節目の年にあたります。理工学研究科では、理工学部後援会並びに理工学部同樹会とともに創設五十周年を記念した事業を実施いたしましたので、この場で簡単

自治体、産業界等の来賓のご臨席のもと、研究科長の式辞に続き、学長の挨拶と来賓の祝辞をいただきました。つぎに「理工学部・理工学部のあゆみ」が古い写真や過去の学部案内を交えて紹介され、理学部第一期生から「同窓生のことば」を、理工学部数理科学科の学生からは「在校生のことば」が披露されて式典が締めくくられました。

記念講演会は、同窓生あるいは現・旧教員の中から理学系と工学系、それぞれ一名に講師をお願いすることとし、人選を研究科長に依頼しました。講師の一人の浅田秀樹教授は理学研究科の修了生で、宇宙物理学の分野で国際的に評価されています。「アインシュタインの一般相対論誕生百周年」と題して講演いただきました。もう一人の稲村隆夫教授は、理工学部の発足に尽力され、理工学研究科長としても指導力を発揮されました。「弘前大学理工学部誕生と私の研究活動」と題して講演いただきました。いずれの講演も大変好評で約百五十名の参加がありました。

また、祝賀会には約八十名、キャンパスツアーには約四十名の参加があり、いずれも盛況のうちに終えることができました。

理学部と理工学部の卒業生は合わせて九千数百人余りです。今回は文理学部の卒業生や在校生の保護者、旧教職員も含めて約九千八百通の案内状を発送しました。このうち約二千通が宛先不明で返送されたことは残念でしたが、それでも約七千八百人の同窓生等と連絡が取ることができたことを意味しています。このことは記念事業の実施が、単に五十周年を祝うばかりでなく、理工学部と同窓生のつながりを今一度確認する機会となったことを示しています。

このような意義ある事業を実施できたのも理工学部後援会並びに理工学部同樹会の力添えがあつてのことと感謝申し上げます。また、今後とも理工学部・理工学研究科の発展にご助力いただけますようお願い申し上げます。

札幌会場保護者懇談会のご報告

理工学部・学務主任 柴 正 敏

平成二十七年九月二十六日(土)に、北海道地区の保護者懇談会が札幌市で開催されました。会場はアクセスの良い、札幌駅前の「アスティ45」でした。本懇談会は、理工学部後援会の方々のバックアップによって開催することができました。本会報の紙面をお借りし、その様子をご報告いたします。

弘前大学の学生の出身地は、青森県と北海道が多く、理工学部の学生も例外ではありません。保護者懇談会を札幌でも催すことになったのは、このような理由からです。五年前から開催しておりますが、保護者の方々の参加人数は増え続けており、本年は百四十名でした。理工学部からの出席者は、宮永研究科長、有賀副研究科長、就職対策委員長、学務主任、各学科長、個



全体説明会



個別相談会場

別相談協力教員と事務の方々でした。

この懇談会は、全体説明会と個別面談の二部から構成されています。前半は全体説明会で、学生の成績評価の仕組みや、就職状況などについてその概要が説明されました。引き続き個別面談が行われ八十二名の保護者が出席しました。相談の内容は、学業および進路

就職のことが中心でしたが、大学の中での、学生たちの知られざる一面を相談員から聞き、参考になったというご意見もありました。

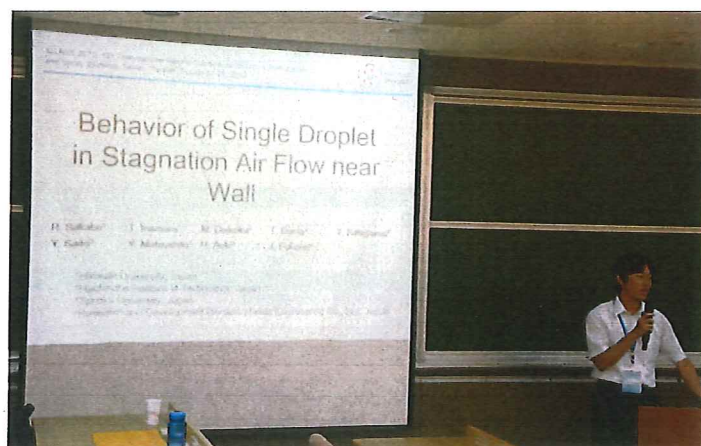
懇談会にご出席された保護者の方々にはアンケート用紙をお配りし、この懇談会へのご意見・ご希望をお伺い致しましたところ、例年ご指摘されていることですが、成績表の見方がよくわからないことや、就職活動の一連の流れが分かりにくいなどです。これらのご意見・ご要望に沿いつつ、より良い会になるよう心掛けて参りますので、今後ともご支援を頂ければと念じております。

第13回国際液体微粒化会議に参加して

理工学研究科知能機械工学コース稲村研究室 坂部 良 太

第13回国際液体微粒化会議(The 13th International Conference on Liquid Atomization and Spray Systems)は二〇一五年八月二十三日から八月二十七までの五日間、台湾の台南市にある國立成功大学で開催され、私は英語での口頭発表を行いました。

ICLASSは液体ロケットや産業用燃焼器の分野から



食品加工、医療用噴霧技術など多岐にわたる微粒化分野の研究者が、世界中から集まり研究成果を発表する会議であります。日本での学会しか経験してこなかった私にとって、海外での学会は非常に興味深いものでしたし、海外渡航の経験のなかった私には海外発表は研究のモチベーションを更に上げる糧となりました。

私の発表タイトルは「Behavior of Single Droplet in Stagnation Air Flow near Wall」と、自動車塗装機の塗装効率向上のために、被塗装面近傍の塗料粒子に対する周囲気流の影響を可視化手法を用いて実験的に明らかにするといったものです。発表、質疑応答時のみならず様々な場面で活発な議論を国内・外の方々と重ねることができ、また貴重な意見を頂き有意義な時間を過ごすことができました。

この経験を通し研究の奥深さを感じると共に英語能力の必要性を強く感じました。こうした貴重な経験ができたのも、指導教員の稲村隆夫先生、共同研究をさせて頂いておりますホンダエンジニアリング様のおかげです。そして、この国際会議に参加することができましたのは旅費を援助して下さいた弘前大学理工学部後援会のおかげであります。深く感謝いたします。

